神戸大学　大学教育研究センター　大学教育研究
第 9 号 （2000年度）　2001年 3月発行：31-40

大学教育の充実と大学図書館の役割
ーアメリカの大学図書館の調査よりー

川嶋太津夫（神戸大学大学教育研究センター教授）

大学教育の充実と大学図書館の役割
ーアメリカの大学図書館調査よりー

川嶋太津夫（神戸大学大学教育研究センター教授）

はじめに

21世紀を迎え、行政改革の一環としてその14年間の歴史に幕を下ろし、新たに発足した中央教育審議会の大学分科会へと再編された大学審議会は、日本の高等教育に関して数々の問題提起と提言を行ってきた。とくに大学学部（学士課程）教育の質的充実に関しては、1998（平成10）年10月に出された答申「21世紀の大学像と今後の改革方策についてー競争的環境の中で個性が輝く大学ー」において、大学教育の目的（教養教育の重視、課題探求能力の育成）と、その目的を実現するための様々な取組（ファカルティ・ディベロップメントの充実、GPA制度に代表される厳格な成績評価の実施、履修科目登録の上限設定、学生による授業評価の実施、シラバスの活用など）に関して、かなり詳細な提言を行っている。しかし、大学教育の、いわば「ソフト」面での改革の必要性に関しては、極めて饒舌な答申も、大学教育のいわば「舞台（インフラ）」であるところの学習環境の整備に関しては、「(前略)指導を担当する個々の教員の努力に加え、図書館の座席数や必読図書の所要冊数の確保、開館時間や開館日、貸出期間などの施設・設備利用の面を含め、学生が学習する場としての大学の学習環境の整備にもこれまで以上に留意する必要がある」と述べるにとどまっている[1]。

しかし、答申も指摘しているように、大学教育の改革・改善は、単に教室内で教員が授業改善の努力をするだけでは不可能である。たとえば、答申がその有効性を強調するシラバスは、各回の授業ごとに予習が指示される著書や論文が、全ての受講生が利用可能でないかぎり、単なる「絵に描いた餅」ならぬただの「紙切れ」にすぎない。アメリカの大学でシラバスが大学教育の充実に有効に機能しているのは、「リザーブ」と呼ばれる、全授業科目のシラバスに記載された必読および推薦図書と文献が全て確保され、2時間程度の短期間の貸出を行っているセクションが大学図書館に存在しているからである。学生は、自分で予習すべき図書や論文を探し出さなくても、リザーブへ行けば必ずそれらが入手できるのである。さらに、リザーブを含め、大学図書館は、朝8時から真夜中まで開館しており、学生は、いつでも学習に必要な文献にアクセスできる[2]。アメリカの大学図書館のすばらしさは（と対照的な日本の大学図書館の劣悪な状況）、すでに繰り返し指摘されているので、ここではこれ以上言及しないが、1920年代にアメリカでは大学進学者が急増し、それに伴って教育方法の改革が行われ、従来の“lecture and textbook method”に替わり“teaching with books”の方法が導入され、急速に大学図書館の利用が高まったという[3]。時代は変わり、いまや“teaching with books”に加えて、“teaching with computers”の教育方法が不可欠な時代であっても、学生の学習空間としての大学図書館の役割と重要性は、より一層高まりこそすれ、低くなることはないであろう。

そこで、今回アメリカの複数の有力大学の図書館と関連団体を訪問する機会を得ることができたので、アメリカの大学図書館、とくに学部学生の「学習図書館」としての役割に注目して、いくつかの特徴を整理してみたい。

1．訪問大学の概要と特色

今回訪問し、図書館の調査を実施した大学は、シカゴ大学(University of Chicago)、ノースウェスタン大学

(Northwestern University)、コロンビア大学(Columbia University)、ジョージ・ワシントン大学(George Washington University)、ラトガース大学(Rutgers, The State University of New Jersey, New Brunswick Campus)、そしてメリーランド大学(University of Maryland College Park)の6大学で、最初の4大学が私立、残りの2大学が州立大学で、全て「カーネギー高等教育機関分類」の2000年版で、最上位に格付けされる「博士号授与・研究重点大学 Doctoral/Research Universities-Extensive」である。このカテゴリーに分類される大学は、アメリカの全高等教育機関3,941校のうち、わずか151大学であり、全体の3.8%を占めるにすぎない[4]。

また、ジョージ・ワシントン大学を除き、北米で最古かつ最も威信が高い大学連合体である「アメリカ大学協会 Association of American Universities」を構成する59大学に含まれている。

さらに6大学の図書館全てが北米の主要な研究図書館(Research Library)122館の連合体である、「研究図書館協会 Association of Research Libraries」の構成メンバーである[5]。以下に、訪問調査した6大学とそれぞれの図書館の概要を示す。

〔1999年〕

	シカゴ大学	ノースウェスタン大学	コロンビア大学	ジョージ・ワシントン大学	ラトガース大学	メリーランド大学
蔵書数	6,419,936	4,014,312	7,144,703	1,948,051	3,777,538	2,772,663
専門職員（司書）数	69	114	168	70	107	108
支援職員数	176	140	253	144	241	121
学生バイト数	80	100	94	47	104	109
全職員数	325	354	515	261	452	338
図書購入費($)	3,714,053	2,468,174	4,790,279	1,022,228	1,486,724	1,915,621
定期刊行物購入費($)	5,402,537	4,310,569	7,186,084	3,862,012	4,723,625	3,468,079
人件費($)	9,645,550	9,652,811	16,074,714	6,726,816	16,544,801	9,654,764
図書館総予算($)	21,967,696	20,271,953	32,302,233	14,608,944	26,034,808	17,380,859
全学生数	10,024	13,861	16,540	12,036	36,147	32,864
（大学院生数）	6,229	5,965	10,757	5,232	4,672	4,179
博士号授与数	383	300	324	85	474	523
全教員数	1,173	1,908	2,663	828	2,100	2,410

2．組織と予算

アメリカの大学図書館の館長は、かつては日本と同じく教員の中から任命されていたが、現在は一部の大学を除き教員ではなく専門的な教育訓練を受けた専門職である司書 librarian の中から選ばれ、またその地位も高く、一般に University Librarian と呼ばれている。たとえば、ノースウェスタン大学の図書館長である Bishop 氏は、著名な大学教授が記念寄付金講座の教授(endowed professorship)に任命されているのと同様に、"Charles Deering McCormick University Librarian" のタイトルを有し、館長の給与はマコーミック氏が寄付した基金から支払われている。館長の多くは、図書館学の大学院を修了後、複数の大学図書館を移動し、大学図書館運営の専門家としてキャリアを高めていく。今回訪問調査を行ったジョージ・ワシントン大学の Siggins 館長は、現在の大学に移動する前は、イェール大学図書館の副館長を務めており、ノースウェスタン大学の Bishop 氏は、1970年代にはシカゴ大学図書館で司書として勤務していた。

アメリカでは私立大学、州立大学を問わず、図書館長は大学の組織の中では Provost（学務担当副学長）の指揮系統下にある[6]。コロンビア大学では、Provost の下に数名いる副学長の一人が情報処理システムの責任者と図書館長を兼務している。日本の国立大学では、図書館職員の人件費を除き、図書館独自の予算は、ほとんど存在しないといってよい。図書や定期刊行物の購入費は、各学部·研究科等に配分される教官研究費（教官当積算校費）から、必要に応じて図書館の予算に振り替えられるに過ぎない。したがって、部局と教官の意向次第では図書購入費に大きな変動が生じる恐れがある。一方、今回調査したアメリカの大学では、人件費を含む図書館の予算に関しても、館長が毎年 Provost と交渉し、予算の配分を大学全体の予算の中から受けることになっている。たとえば、ノースウェスタン大学の場合、1999 年度の図書館の歳入総額 17,046,602 ドルのうち、大学からの 15,720,116 ドルと、図書館の基金や寄付からの 1,326,602 ドルが、その財源であった。

しかし、このシステムも大学自体が財政危機に陥れば、図書館自体の予算も大きな影響を受ける。現実に、シカゴ大学では 1990 年代半ばに大学が教育プログラムの見直しを行い、伝統ある教育学部の閉鎖を決定するなどの危機的状況にあったが、その際、3 年間にわたって図書館の予算が凍結され、そのため 24 名の職員を解雇せざるを得なかった[7]。そこで、各大学図書館は、独自の財源確保に努めている。

まず注目すべきは、アメリカの大学が多くの基本財産（endowment）を有しているように、図書館自体も独自の基本財産を有し、その増額に務めていることである。先に館長の給与が基本財産から支払われていると紹介したノースウェスタン大学図書館は、1500 万ドルの基本財産を有している（大学の基本財産は 20 億ドル。ともに 1999 年度）。またメリーランド大学図書館は、1700 万ドル（大学自体の基本財産は 3 億 4 千万ドル。1998 年度）、さらに、ジョージ・ワシントン大学図書館は、850 万ドルの基本財産を有している。基本財産は、寄付者から支出先が指定されている場合が多いが、メリーランド大学図書館の場合は、半数以上が、寄付者によって支出先が指定されない「自由な基金（unrestricted fund）」となっており、Lowry 図書館長は、職務の 20 %以上の時間を寄付金集めに割いているという。また、コロンビア大学では、人文社会科学系の研究図書館で、学部学生図書館もかねる Butler Library のリノベーションを 1994 年から 10 年計画で開始したが、寄付と引き換えに図書館内の読書室に寄付者の名前を冠することで、リノベーションに必要な予算 7 千万ドルのうち、1 千万ドルは同窓生から寄付を集めたという。このように寄付金を多く集めるために、図書館には寄付集めを担当する専門の職員（development officer）が置かれている。

大学図書館が独自財源を確保する二つ目の方法は、学生から図書館使用料を「寄付」または「徴収」することである。ジョージ・ワシントン大学では、各学期に図書館使用料として 50 ドルを「寄付」してもらっており、実質的にほぼ全ての学生が「寄付」しているという。そのため、寄付金の支出に関して透明性を確保するために、図書館内に毎学期、学生による寄付金の支出先の明細が掲示されている。また、メリーランド大学では、図書利用料を学生から各学期に 50 ドル徴収することを検討しており、これが実現すれば、1 年間で 350 万ドルの増収になるという。

第三の方法は、図書館がいわば「営業」活動を行うことで収益を上げようとするもので、ジョージ・ワシントン大学では、外部の個人や企業から図書館でのリサーチを受託する部門が設置されており、3 人のスタッフがこの事業に従事しているが、スタッフの給与は全てこの事業からの収益から支払われている。

このように、アメリカの各大学図書館は、さまざまな工夫と努力で独自財源の確保に努めているが、それでも図書や定期刊行物の購入に潤沢な予算が確保されているわけではない。というのも、図書館の予算のかなりの部分が人件費をはじめとする経常経費に、支出がすでに固定されているからである。一番の大きな経常費である人件費は、全図書館予算の 44 %（シカゴ大学）から 64 %（ラトガース大学）を占めている。さらに、近年の図書の値上がりも見逃せない。ジョージ・ワシントン大学の Siggins 館長によれば、単行本は 5 %、定期刊行物は 10 %、そして電子化図書は 10 %以上の率で毎年値上がりしており、購入図書の冊数を減らしたり、定期刊行物の

購読を打ち切ったりせざるを得ないという。研究図書館協会によれば、1986 年から 1998 年の間に、加盟館は定期刊行物への支出が 1.52 倍に増えたが、実際に購入された雑誌タイトルの数は 7 %減っている。

そこで、各大学は他の大学図書館とコンソーシアムを形成し、予算の合理的な支出とサービスの向上に努めている。たとえば、ジョージ・ワシントン大学は、ワシントン特別区にある 7 大学とコンソーシアムを組織し、カタログを統一し、共有の書庫を郊外に 8 年前に建設し、使用頻度の少ない図書を収納し、また各大学の学生と教員は自由にそれぞれの図書館が相互に利用できる協定を結んでいる。また、メリーランド大学図書館は、州内の大学や研究所など 60 機関と Maryland Digital Library Consortium を形成し、データベースを共有している。さらに、76 カ国の 38,000 にものぼる図書館が加盟している OCLC(Online Computer Library Center)の加盟館は定期的に出版社と価格交渉を集団で行い、スケール・メリットを生かして、有利な購入価格を獲得したという[8]。さらにまた、カナダは、国全体で電子ジャーナルやデータベースのサイトライセンスを獲得し、個々の大学図書館の経費の節減に成功している。

3．学部教育と大学図書館

今回調査に訪れた 6 大学は、研究重視の大学院大学の印象が強い。先にも紹介したように、6 大学全てがカーネギー財団の大学分類では「博士号授与・研究重点大学」であるし、ジョージ・ワシントン大学を除いて、残りの 5 大学は、学術研究と大学院教育・プロフェッショナル教育を重視する 59 のアメリカ大学と 2 つのカナダ大学が構成メンバーである「アメリカ大学協会 (Association of American Universities)」のメンバー大学であり、研究中心の大学院大学の印象が強い。しかし、これらの大学は、実は学部（学士課程 undergraduate）教育でも評価が高い大学である。たとえば、*U. S. News & World Report* 誌の 2001 年のランキングでは、228 校からなる「全国大学（National Universities）」のカテゴリーの中で、シカゴ大学とコロンビア大学が 10 位に、ノースウェスタン大学が 13 位にそれぞれランクされ、ジョージ・ワシントン大学とメリーランド大学が第 2 グループ（52 位から 115 位）に、ラトガース大学は、それに続く第 3 グループ（116 位から 171 位）にランクされている。またシカゴ大学とコロンビア大学では、大学院学生数のほうが学部学生数を上回っている。にもかかわらず、学部教育のランキングでは、この 2 校はベストテンにランクされているのである。

このように学術研究と大学院教育で国内のみならず国際的にも超一流の大学が、学部教育でも高い評価を得、またその水準の維持に努力を傾注しているのは、シカゴ大学を除けば、いずれも大学はカレッジとして設立されたという歴史的背景もあるが、それよりも重要な要因は、とりわけ私立大学においては、学部学生からの授業料が大学の大きな収入源になっているからである。たとえば、ノースウェスタン大学では、大学の全収入の 52 %が学部生からの授業料である。それと対照的に、大学院教育は、大学院学生への奨学金給付や授業料免除など、むしろ大学にとって財政的には負担のほうが大きい。そこで、各大学は、学部の学生定員を増やすとともに、高額な授業料に見合うだけの良質な教育の提供が、学生確保にとって不可欠となっている。先にも紹介したコロンビア大学の Butler 図書館のリノベーションも、学部教育重視に伴う、学生寮や教室の拡張や新設とともに、学部図書館としての機能充実を目指したものである。

では、学部学生と学部教育にとって、大学図書館は、どのような意味と意義をもっているのだろうか。

（1）学習の場、交流の場としての図書館

アメリカの大学生にとって、図書館は、もはや読書や学習の空間だけではない。大学キャンパスがネットワークで結ばれ、学生寮からも図書館のデータベースにアクセスが可能であり、従来図書館へ来て行っていた作業の半分は、寮の自室で可能になっている。しかし、それでも多くの学部学生は図書館にやってくる。ある者は、寮

の喧騒から逃れて静かに読書するために。またある者は友人と共同の作業を行うために。また別の学生は、コンピュータ端末室でレポートを作成するために。そしてかなりの学生は、図書館の地下のカフェテリアで、飲んだり食べたりするために。このように、図書館に対する学生のニーズは極めて多様化しているのがアメリカの現状である。その多様なニーズに応えるために、各大学図書館は、さまざまな工夫を凝らしている。たとえば、ほとんどが開架となっている書庫の中に、キャレル型の机と椅子だけでなく、すわり心地のいいソファを配置したり、コンピュータのコンセントを多数備えたグループ学習室を数多く設置したり、また書庫の部分を縮小し、コンピュータルームを増設したりすることによって、図書館を学生が集い、多様な活動に従事するセンターへと転換する試みが、今回訪問した全ての大学で行われている。その背後にあるのは「顧客満足（customer satisfaction)」あるいは「利用者優先（user-friendly)」という考えであり、学生が図書館に何を求め、どこに満足していないのかをつねにモニターする姿勢である。その結果、シカゴ大学とノースウェスタン大学を除き、全ての大学図書館に 24 時間開館している学習室・読書室が設置されていた[9]。試験期間を除けば、実際に深夜まで図書館を利用する学生が、非常に多いというわけではないが、コロンビア大学の学部担当司書（Undergraduate Librarian）である DeDonate 氏によれば、図書館が「24 時間利用可能であり、学習できる」ということが学生にとって意味あることであり、それは、大学図書館が、学生のために存在し、学生へのサービスを第一に考えていることを象徴するものであるという。

（2）学問の世界へ通じるゲートウェイとしての学部図書館

今回訪問した 6 大学のなかで、学部学生のための独立した図書館を設置していたのは、シカゴ大学だけであった。シカゴ大学の Harper Library は、設立時は中央図書館としての役割を果たしていたが、人文社会系の研究図書館として Regenstein Library が開館された後は、同じ建物にシカゴ大学の学部教育(College)の事務局や教室が多数あることもあって、学部学生用の図書館へと転換された。しかし、実際には学部学生も Regenstein Library を利用しているし、また逆に大学院学生が Harper Library を利用することもある。1970 年に完成した Regenstein Library が 7 層からなる近代的で、書庫やキャレルやグループ学習室などが機能的に配置された図書館であるのに対して、Harper Library は、19 世紀末に建設されたゴシック様式の建物の中に位置し、天井の高い体育館のような大きな一つの読書室に、木の机と椅子が配置された、クラッシックな図書館である。結局、学生は、自分の好みや、その時の気分によって、双方の図書館を使い分けている。ただし、学部の授業の多くが、Harper Library と同じ建物の中で行われるため、学部の授業の必読図書などを貸し出す「リザーブ（Reserve)」は、Harper Library に置かれている。

しかし、学部図書館を独自に設置していない大学が、学部教育を軽視しているわけではない。むしろ、先にも指摘したように、学部教育を一層重視している大学が多い。そこで、図書館側も、学部教育を充実させるために、いくつかの工夫を行っている。その一つは、コロンビア大学の Butler Library の例である。先述のように、この図書館は、独立した学部図書館ではなく、人文学・歴史を中心としたコレクションからなる研究図書館である。しかし、この図書館には、学部担当司書が 2 名(もう 1 名増員予定)配置されており、学部生用図書の選書、約 10 万冊の学部生用蔵書のメンテナンスなどに従事している。とくに、ここで重点が置かれているのが、コロンビア大学の学部教育の特色である「コア・カリキュラム」に関連した図書を中心に選書することである。とりわけ、「"Major Cultures"（主要文明)」のコースは、アメリカを含む西欧文明以外の文明（アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、アフリカ系アメリカ）を授業で取り上げるため、 学部生が理解しやすいように原語ではなく英語で出版された図書を選書することを心がけている。

もう一つの例としては、ノースウェスタン大学の「コア・コレクション」があげられる。これは、1969 年に教員から利用率の高い図書を選書したらどうかという提案があり、教員と司書との合同委員会を設け、全ての学

生が読むべき基本図書を、哲学的な観点から、当初は5万冊選書し(現在は3万5千冊)、全てを館外持ち出し禁止とした上で、図書館の中に「コア・コレクション」と名づけたコーナーを設けたものである。ただし、何をコレクションに入れるのかに関しては、議論が起こり、最初は、いわゆる西欧社会の古典と言われる図書を中心にしてコレクションを構成していたが、現在ではフェミニズムやアフリカ関係の図書も、このコレクションに加えられている。

コロンビア大学図書館とノースウェスタン大学図書館の学部生用図書に関する考え方に共通するのは、学部図書館あるいは学部生用図書を、「研究への入口」あるいは「中核的な蔵書への入口」、つまり学問や研究への「ゲートウェイ（Gateway)」と位置付ける考え方である。大学生になってすぐに研究図書館や中央図書館の膨大な蔵書を前にしても、学部生は戸惑うばかりである。たとえば、学部生が、南北戦争についての本を読もうと思っても、書庫には何万冊もの関連図書が配架されているので、どれを読んでいいのか判断できない。そこで、学部生用のコレクションとして、入門的、基礎的な図書を中心に選書することになる。その本を読書後、さらに関連した図書を必要とする時は、レファレンス・コーナーで関連した図書の指示を受ければよい。このようにして、アメリカの大学図書館は、学部生とそれぞれの学部教育の特色に合ったサービスを提供し、学部教育の充実に貢献している。

（3）リザーブ制度

学部教育のみならず大学院も含めてアメリカの大学教育にとって不可欠な存在が、大学図書館の「リザーブ室（Reserve Room）」である。アメリカでは、日本の「電話帳」のようなシラバスとは異なり、授業ごとに詳細なシラバスが受講生に配布される。このシラバスには、授業時間ごとにあらかじめ目を通すべき文献リストが掲載されているが、当該学期に開講されている全ての授業科目について、それぞれの必読文献及び参考文献を全て用意しているのが「リザーブ」である。この仕組みによって、学生は自分でカタログを検索することなく、授業に必要な文献を入手でき、予習して授業に望むことができる。ただし、受講生の誰もが利用するため、リザーブの文献の貸出時間は2時間と短く、また返却が遅れた場合の延滞金は、一般図書の場合より高くなっている。そして、その延滞金を支払わない場合、卒業に必要な成績証明書を発行しない規則になっている大学もある(ノースウェスタン大学)。それほど、リザーブはアメリカの大学教育と図書館にとって、重要な位置を占めているのである。

ところが、この「リザーブ」システムに、現在画期的なことが起きている。それは、インターネットの発達、カタログの電子化の完成、電子ジャーナルの普及などによって「電子リザーブ」化が急速に進んでいることである。最初にリザーブを電子化したのは、ノースウェスタン大学図書館であるが、WEB上に「リザーブ」が出現したことにより、アメリカでは大学教育の充実が一層進んでいる。従来のシステムでは、教員は学期が始まる数週間前までにシラバスを作成し、それを図書館に送付し、図書館はそれをもとに単行本に関しては、書庫からリザーブ・ルームへ移し、雑誌論文については該当論文のコピーを作成していた。また、単行本に関しては、図書館に蔵書がない場合は、新たに出版社に発注したり、受講生が多い場合は複数のコピーを用意したりしなければならなかった。さらに、学生は、自分でリザーブ・ルームまで出かけ、必要な図書や論文コピーを借り出し、短時間のうちに急いで読んだり、自分でコピーしたりしなければならなかった。

しかし、電子リザーブのシステムの出現により、教員は研究室のパソコンからシラバスを図書館に転送し、図書館は、それをもとに単行本の指定された章や雑誌の該当論文をPDF形式のファイルに転換したり、すでに電子化されているジャーナル論文の場合は、シラバスにリンクを張る作業をしたりすることになる。学生は、自分のパソコンを使って受講している科目のホームページから、あるいは、図書館のホームページ上に構築された電子リザーブから、それぞれのシラバスにアクセスし、ハイパー・テキスト化された参考文献名をクリックすれば、

瞬時に文献が入手できるのである。また、ラトガース大学では、「電子ブック（e-book)」を多数購入し、必読テキストのソフトをインストールして貸し出しを行っている。なお、現在では文字資料だけでなく、ノースウェスタン大学やコロンビア大学の図書館では、オーディオ資料やビジュアル資料の電子化も試みられている。

多くの大学図書館は、教員に担当コースのホームページを作るように依頼し、教育と図書館との連携を一層強化しようとしている。というのも、学生が履修届を提出する前にホームページにアクセスし、そのシラバスを調べることが可能になれば、履修途中で受講を放棄することも少なくなるからである[10]。そのため大学図書館が、教員を対象としたコースのホームページ作成の講習会を頻繁に開催し、教員と教育の支援活動を積極的に展開している。[11]

4．教育職としての図書館司書、教育機関としての図書館

これまで述べてきた、学習空間としての大学図書館、コア・コレクションをはじめとする学部生用図書コレクション、そしてリザーブ制度を通じて、アメリカの大学図書館が、学部教育の充実と改善に多大な貢献をなしてきたことは確かであり、日本の大学図書館が大いに見習わなければならないことはいうまでもない。しかし、いまアメリカの大学図書館とそこで働く司書は、さらに積極的な役割へと変身をとげつつある。つまり、これまでの司書や大学図書館が、大学教員や大学教育の、いわば「支援者」としての役割に過ぎなかったのに対し、いまや司書も図書館も、教員の「同僚（colleague)」として大学教育に積極的に参加し始めているのである。かつての司書は、図書の管理や貸し出しだけを行っていれば良かったが、とくにいまは「教育」が重要な仕事になってきたのである。

そのことを最も明確に表しているのが、司書（librarian）の大学内での地位である。アメリカでは、4 割の大学で司書に「教授団（Faculty)」としての地位が与えられている。というのも、アメリカの司書は専門職として、大学院レベルの教育が必要とされ、特定の学問分野（例えば英文学や生物学など）で修士号（MA）を取得した後、プロフェッショナル・スクールである「図書館情報学大学院（Graduate School of Library and Information Sciences)」で「図書館学修士号(Master of Library Science)」を取得し、図書館に「若手司書(junior librarian)」として採用される。したがって、職務上の義務も他の大学教員(teaching faculty)と同様に、「研究（research)」、「教育（teaching)」そして「サービス（service)」が求められている。ラトガース大学では、教員同様採用 6 年目に「終身在職権（tenure)」の審査があり、それが認められなければ、他の図書館に移動しなければならない(“up or out”)。研究活動としては、何回か学会に参加し、関係するジャーナルに論文を寄稿しなければならない。そのために、大学から一定額の旅費と研修費が支給されている。また、サービスとしては、従来の仕事である、図書の管理や貸し出し業務、そして参考業務の充実が当然求められる。

それに加えて、いま重視されているのが、司書の教育義務である。とくにインターネットが発達し、これまで述べてきたように、大学教育や図書館で積極的に利用されているアメリカでは、大学図書館と司書に「情報リテラシー」教育への主体的な参加が求められている。たとえば、コロンビア大学では、学部のコア・コースの一つである「論理と修辞（Logic and Rhetoric)」の授業では、従来はクラスの担当教員が図書館の利用の仕方を新入生に指導していた。しかし、現在はコア・カリキュラムの主任と交渉し、正規の授業時間の中に枠を設けて、司書が図書館の利用の仕方についての授業を担当している。とくに、1 年生のコア・コースの授業は、主にテキストの解釈や議論が中心で、「研究（research)」の経験が欠けている。そこで、図書館の中に設置されている 4 つの「教室」で図書館での研究の仕方を教えている。具体的には、たとえば受講生に祖父の誕生日と同じ日の *New York Times* から興味のある記事を 1 つ選び、さらにそれと関連した記事を他のメディアから見つけ出してくる、といった課題を与え、図書館やメディアの変化やそれらの歴史を体験させる教育を行っている。また上

級生に対しては、それぞれの専攻に関わる特定のテーマについての図書館利用法を教えるセミナーを開催し、卒業論文を執筆する時に必要な事柄を教えている。このようにして、アメリカの大学図書館の司書は、図書館を単なる学習の場所ではなく、研究の場所として学部生に利用してもらうために、積極的に教育に従事しているのである。つまり、アメリカの学部図書館は、いまや学部生の学習の場としてだけでなく、教育の場でもあり、研究の場にもなっているのである。そして大学図書館の機能の変化に応じて、そこで働く司書の役割も、大学教員の支援者にとどまらず、主体的に自らが教育者として学生の教育に関わっていこうとしているのである("Reaching Out")。

おわりに

かつてアメリカのジョンズ・ホプキンス大学の初代学長であったDaniel C. Gilmanは、図書館は「大学の心臓」であると述べた。またシカゴ大学の第5代学長のRobert M. Hutchinsが廃止を決めたキャンパスの中心にあったフットボール・スタジアムの跡地には、いま巨大なRegenstein Libraryが聳え立っている。アメリカの大学にとって、その図書館は、大学が何を考えているのかについてのメッセージを社会と学生に対して発信するシンボルなのである。図書館の建物や施設・設備といったハード面、蔵書数やコレクションの多様性、そしてレファレンス・サービスの充実度とアクセスのしやすさ、開館時間の柔軟性、といったソフト面。それら全てが、その大学が学生の教育と教員の研究をどれだけ重視しているのかを、一瞬にして物語る。メリーランド大学のカレッジパーク校は広大な敷地の中心に、方形のよく手入れされた芝生の広場（Quadrangle）が作られ、大学の中央図書館であるMcKeldin Libraryと大学の本部の建物が、この芝生広場をはさんで向かい合うように建てられている。しかし、図書館の立つ場所のほうが、本部の建物の場所より一段高くなっている。つまり、巨大な中央図書館が、学長をはじめ大学の主要な権力者が勤務する大学本部の建物を、あたかも見下ろすように聳え立っているのである。"Spiritual Power Over Governmental Power"。これ以上、アメリカの大学図書館の重要性を簡潔に表す言葉はないであろう。

ひるがえって、日本の大学図書館、とくに国立大学の図書館の現状は、どうであろうか。ほとんどが閉架式の書庫。書庫の床にまであふれる蔵書。旧仮名遣いの古い図書。1時間も座っていると腰が痛くなる椅子。平日は5時に閉館し、休日は完全休館する管理体制。このような状況の中で、大学審議会が提言する、課題探求能力の育成を目指した大学教育の実現は可能であろうか。大学教員の意識を研究重視から教育重視へ、学生のアルバイトやクラブ活動を中心とした生活から、学習をメインとした生活への変換。いずれも、意識の変化を伴うため、すぐには実現できない改革である。しかし、図書館の充実は、大学にやる気と資金さえあれば、可能な施策である。そして、生態学が我々に教えるところによれば、環境の変化はそこで生活する生物の行動を変えるという。大学教育の改革の第一歩として、大学図書館の施設設備と機能の一層の充実を望みたい。

＜注＞

1) 大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－（答申）』、平成10年12月、48頁。

2) アメリカのジョンズ・ホプキンス大学では、創設間もない1876年に、すでに大学図書館の開館時間は、午前9時から午後10時までになっていた。Hugh Hawkins, *Pioneer: A History of the Johns Hopkins University, 1874-1889*, Cornell University Press, 1960, p.118.

3) 高橋美子「図書館員の専門性と選書：蔵書構築の関わりについて」（明治大学図書館編『図書の譜：明治大学

図書館紀要」 No.2, 1998 年。

4) 「博士号授与・研究重点大学」とは、あらゆる学問分野で学士課程のプログラムを提供するとともに、博士課程のプログラムを通じて大学院教育にも関与する大学で、少なくとも 15 の学問分野にわたって年間50以上の博士号を授与している大学のことを指す。
(http://www.carnegiefoundation.org/Classification/CIHE2000/defNotes/Definitions.htm 参照)

5) 大学図書館以外では、議会図書館、スミソニアン協会図書館、ニューヨーク市立図書館などの公立図書館 10 館が、構成メンバーに含まれる。

6) Provost は、アメリカの大学では "Chief Academic Officer" と位置付けられ、学長 President に次ぐ地位であるが、大学の教育研究活動と予算及び大学の戦略計画策定に関する事実上の最高責任者である。学長が対外的に大学を代表する地位であるのに対して、Provost は、学内的に大学を代表する地位である。

7) Runkle 館長とのインタビューから。

8) たとえば、2000 年には、電子化された *Oxford English Dictionary* の場合、利用者が 500 万人であれば、使用料は一人当たり 80 セントであるが、利用者が 2 千万人ならば 20 セントにまで下げることができたという。

9) シカゴ大学図書館は、学期中の週日は深夜 1 時まで開館し、期末試験期間中は、学部図書館である Harper Library が、24 時間開館している。また、ノースウェスタン大学図書館では、学部学生のためのコア・コレクション、共同学習室、コピー機、コンピュータのコンセントが完備された「学習資源センター(Study Resource Center)」は、深夜 2 時まで利用可能であり、学生のお気に入りの場所となっている。

10) アメリカでは 1 学期に受講できる科目数が 3 科目から 5 科目程度に制限されている。授業内容が予想と異なっていたり、難しすぎたりして途中で受講をキャンセルすることは、卒業の遅れにつながることになるので、できる限り受講前に各授業のシラバスを開示することが教員と大学に強く求められている。

11) コースのホームページ作成に便利な統合ソフトとしては、"Prometheus" がある。このソフトを使用すると、教員はインタラクティブにシラバスを作成できるだけでなく、オンラインで試験を実施したり、チャットルームを開設し、学生同士や教員と学生の間でディスカッションしたり、学生は辞書やシソーラスを参照することもできる。(http://www.prometheus.com 参照)

本稿は 1999 年度の神戸大学学長裁量経費からの支出により可能になった、短期在外研究の成果をもとにしている。当時の西塚泰美学長（現在神戸大学名誉教授）に感謝するとともに、調査に同行した、神戸大学大学教育研究センターの山内乾史助教授、神哲三主計課長（現在久留米高等工業専門学校事務部長）および土屋祥子付属図書館主任にもここで謝意を述べたい。ここで述べられた意見は、すべて筆者のものであることをお断りしておく。

なお、多忙の中、われわれの訪問に快く応じて下さった、訪問大学の図書館長および図書館のスタッフの方々に、深くお礼を申し上げます。本来ならば、全てのお名前を記載すべきですが、各大学の代表の方だけ、ここに紹介させていただきます。

シカゴ大学	Martin Runkle 付属図書館長
ノースウェスタン大学	David F. Bishop 付属図書館長
コロンビア大学	Ree DeDenate 学部担当司書
ラトガース大学	Marianne I. Gaunt 付属図書館長
ジョージ・ワシントン大学	Jack A. Siggins 付属図書館長
メリーランド大学	Charles B. Lowry 付属図書館長
大学図書館及び研究図書館協会	Mary Ellen Davis 上級副事務局長

Improvement of the Quality of Undergraduate Education and the Role of University Library : A Study on the University Libraries in the United States

KAWASHIMA, Tatsuo (Professor, R.I.H.E., Kobe University)

The University Council in Japan has proposed many policy recommendations to improve the quality of undergraduate education in Japan, such as the use of syllabi, the introduction of GPA system and the encouragement for the faculty to participate in faculty development. Strangely enough, however, it hardly referred to the important role of the university library contributing to improve the quality of undergraduate education in Japan.

In the United States, on the contrary, the importance of the undergraduate library is well recognized. Every university and college is making effort to make its library more better environment for learning of undergraduate students. For example, many libraries open 24hours a day, give the various places for them to study and discuss each other, equip with more PC, and make the reserve room digitized. Most students now can get every resources for their class from their own PC, but they still come to the library to study, to meet friends, even to eat and drink. Thus even in the age of the Internet, the role of the university library is still crucial for education of undergraduate students.

The role of the libraries and librarians so far have been considered to be supportive to teaching and the teaching faculty. Now their roles are changing into more crucial one that the librarians take a responsibility of education of the undergraduate students to teach how to conduct research in the library with the teaching faculty, that is becoming more emphasized in undergraduate program in the United States. The libraries and librarians are making great effort to "reach out" to their customers. That the library is the educational institution and the librarian is the educator is of the well recognition. We, then, have to learn not only the method of teaching and the various tools but the infrastructure like the library system to improve the quality of undergraduate education in Japan from the United States.

Finally, but not least I express my gratitude for those who gave us many assistance in the United States.